《翻　訳》

アラン・コルバン著『快楽の調和』より（2）
—第2章（前半）—

尾　河　直　哉

Traduction japonaise de *L'harmonie des plaisirs* d'Alain Corbin (2)

NAOYA OGAWA

キーワード
フランス近代史（histoire moderne française）、感性の歴史学（histoire du sensible）、性科学（sexologie）、アナール学派（Annales）、アラン・コルバン（Alain Corbin）

第二章

快感の質と細部

ここではハラーとともにすべてが始まる。彼は、一七七四年、「性的快楽」を読み解く読解格子を提案するが[1]、そこに含まれる諸要素は十九世紀中葉までたえず取り上げられ、充実されてゆくことになる。ハラーはまず、男性における精子の分泌とその生成を促進する心的要因を研究し、勃起が意志の力に従うわけではないいじょう、想像力のはたす役割、とりわけ、扇情的な画像を見たり、エロティックな文字媒体を読んだり、快楽の思い出に耽ったりするときに抱く幻想がはたす役割はきわめて重要だと力説する。男性の欲望を刺激する他の要素にも検討を加え、愛撫や女性性器の臭いなどを挙げて、後者には決定的な重要性を認めている。ハラーは医者として勃起の程度、いわば勃起の質にしばらく注目し、陰茎亀頭を快楽の源泉と考える。挿入を記述し、次いで「快感が絶頂に達した」ときに「神経の痙攣性緊張[2]」によって惹起されると考えていた射精の強度を計測しようと試みる。この分析からハラーは次のような結論を導き出す。人間は「精子が最も少なく、性交にたいして最も力を持たない動物[3]」で、ロバ、馬、猪と比べるとその性的功績は貧しい。続いて本来の意味での快感、すなわち「大きな身震い」を伴う

「極度の痙攣[4]」の記述に至る。このとき、脈拍は上昇し、心臓は早鐘を打ち、呼吸は苦しくなり、まるで激しい努力を強いられたときようになる。次に性交が男性に強いる準備期間について考察し、精子の備蓄、欲望の強さ、行為の回数、休息期間の長さといった一連の助変数に応じて変化はあるものの、それを三日とする。最後に過度な性交が惹起する危険について述べ、視力低下、「脊髄癆[5]」、さらには急死をも招くと述べる。ハラーが努めて男性の快感と女性のオルガスムを区別して描き、前者に多くの叙述を費やしていることは注目に値する。

ハラーが女性の快感に与える記述からは、快感の淵源という問題が提起されるが、この問題についてはのちにふれる必要があろう。いずれにせよ、女性における欲望の亢進についてハラーが与える説明は詳細を極めている。愛撫によってクリトリスが勃起すると、女性は我慢ができなくなる。膝が震えて力が抜けるいっぽう、乳房は熱を帯びて赤みが差し、膨張して円錐状に固くなる。もっとも、ハラーは膣の役割を排除しているわけではなく、外生殖器全体を扇情的にくすぐることの効果を過小評価しているわけではない。ビュフォン以後、ただしカバニスと観念学派（イデオローグ）にははるかに先だって、ハラーは母性と乳房の感覚がいかに緊密な同調性を持つか力説している。次いで固有の意味での女性快楽のメカニズムに取りかかる。膣の組織が膨張し、歓びのなかでペニスを締め付けると、まもなく卵管と卵子にもかかわる「性的な痙攣」がやってくる。事実、ハラーはヒポクラテス派とガレノス派の二重精液理論を堂々と退け、「女性において精液はいささかも形成されない[6]」と確言して、粘液の役割を取り上げるだけにとどめている。その代わり、受胎の成功を知らせる身震いを排除していない点ではヒポクラテスの基本路線に沿っており、ビュフォンとも意見を同じくしている。

さまざまな法則が快楽の経過にいかなる役割をはたしているのかという問題に、ハラーははっきりとした答えを出していない。その代わり、肉体関係において男女どちらがより強い快感を感じるかという紋切り型の問い、いわゆるトレシアの謎についてはきっぱり裁定を下し、陰茎亀頭がクリトリスよりもはるかに大きく、「性行為」においてより膨張するという事実から、「射精のときに、男性が女性よりもはるかに強い興奮を感じている[7]」ことは明かだとしている。二重精液理論が放棄されてもなお、射精モデルに依拠せずに女性の快感を理解することがいかに困難であったかを示す推論である。

医学文献を読むと、個々の人間が「自然」の要求に従い、全身全霊をかけて種の保存に勤しむがゆえに人類で最も重要な行為だと考えられる行為に、医者たちがいかに重きを置いていたか看取できる。そのとき個人は我を忘れ、死と紙一重の強烈な興奮に身を委ねる。この行為は、個人を超越しているからこそ他の何にも比肩できず筆舌にも尽くしがたい快感を与え、個人を圧倒するからこそ比類ないエネルギーの消耗を可能にするのである。後に練り上げられた性概念の影響を受けたわれわれフロイトの末裔たちにとっては、男女の肉体的結合力が当時いかなるものだと考えられていたか、理解することさえむずかしい[8]。当時の医学文献にわれわれが感じる違和感はここからやってくる。事情は、当時の芸術裸体画を見たときに感じる違和感といささかも違わない。

きわめて重要なのは、当時人間の諸機能の最高位に考えられていたものを成就するさいに惹起される興奮がいかなる広がりを示しているか、これをきちんと把握することである。十九世紀のポルノグラフィーやオルガスム機械が、肉体的結合を一世紀にわたって高く評価してきた運動の帰結だと考えないようにしよう。また、一七七〇年から一八六〇年までのこうした医学的言説を読むとき、異性愛という観念すら考えることができなかった事実を理解しなければならない。異性愛という観念が可能なためには、ふたつの概念が練り上げられていなければならないが、当時それらは知られていなかっ

た。まずは性欲という概念。そしてもうひとつは、「『自然』の要求」の成就にともなう快感と欲望とを切り離す、同性愛の概念である。

一七七〇年代初頭から十九世紀中葉にかけては、性交にかんする医学的言説からは詩的な高揚感がいくぶん後退し、臨床的な距離と精度が増大するという特徴が見られる。繰り返しになるが、これは、生気論、さらには感覚論の影響がある程度弱まり、それにともなって観察や計測が可能な生理学が目立ってきたことによる変化である。この時期の描像を読むと、それ以外にもいくつかのことに気づく。まず、当時の医者がひんぱんに参照していたルクレティウスの『事物の本性について』を別にすれば、このころの描像には系統的な要素がほとんど存在しない。また、エロティック文学は、興奮という明確な目的に応えているにもかかわらず、性的快楽を描きながら足を止めて悦に入ることも、精緻を極めることも、それどころか高揚することさえめったにない。驚くべきは医者たちの語調の明かな自由さで、自然にたいする逸脱・背信行為にでもかかわらないかぎり、医者たちは快感の記述を苦労してまでラテン語で書こうとはしていない。ちなみに、彼らの著作のうちには同業者の輪の外で読まれていたものがある——ベローの著作[9]などがそれで、モロー・ド・ラ・サルトとデランドの概論書にいたっては、教育者や家庭の母親に向けて書かれている。しかも、ロマン主義文学に対して周知のような過酷な検閲がなされていたこの時代に。

したがってわれわれは、エロティック文学と医学的著作を近づけるものと分かつのものの分析しなければならない。いずれにせよ、性にかかわる学問の淵源にかんする問いが最も重要であることに変わりはない。ここまで引用してきた文献の著者に性交の臨床的な観察を行ないえなかったことは明かである。したがって、彼らの知見は、自分自身やパートナーの興奮を観察したり、いくにんかの患者から苦労して引き出しえたものだろう。また、痙攣や女子色情症（ニンフォマニア）やヒステリーの発作を観察するうちに知らず知らず転移が働いて、その結果、性交場面全体ではないにせよ、少なくとも、快楽の絶頂にやってくる「性的痙攣」の描像を豊かにすることができたとも考えられる。

一七七〇年から十九世紀中葉にかけて、一連のプロセスが、描像の洗練と解釈の修正に向けて協力しあった。二重精液理論の完全にして決定的な廃棄。男女の生殖器、とくに陰茎亀頭とクリトリスの神経分布にかんする解剖学的な、とりわけ生理学的な知識の増大。妊娠メカニズムの理解における進歩。この時期の最後に現れた「自然排卵」の理論。そしてなにより、厳格な自己観察の促進や性行為の苦悩と失敗について尋ねる手続きを洗練させるために払われた努力、などがそれである。こうした歩みは、インポテンツの、次いで冷感症の治療にあたって編み出された欲望の度合いと快感の度合いの分析に極まる。ただし、この間に骨相学がつかのま流行し、精液漏にしばらく注目が注がれたことによって、この分野に混乱がもたらされたこと——ただし、貢献もいくつかあった——も忘れてはならない。

〈欲望の高まり〉

医学テクストに表現されている欲望と快感の描像をより精密に分析してみよう。十九世紀初頭に色情狂（エロトマニー）と形容されることになる、肉体的結合にも自慰にも至ることのないあらゆる欲望は直ちに除外しておく。医者たちにとって男女の良好な関係とは（一）欲望の相互性、（二）性交の実践、（三）「震盪」[10]の共有である。たとえば、一七七二年、外科医のリニャックは「情念の激しさ」と性的快楽を混同しないよう求めている。かつてルクレティウスが言ったように、快楽をすみずみまで味わいたいなら、いかなる幻想も避ける必要がある。

十八世紀末から十九世紀初頭にかけておこなわれた性交欲のこうした分析は、博物学と、それを含む比較研究に大きく依存したままであった。医者たちは、この観点から、人間における欲望の優位と永続性を称揚している。すでに頻繁に現れていたこの主題を、一八一一年にリシュランは再び繰り返している。「いつでも伴侶に近づくことができ、いかなる気候においても、いかなる気温においても伴侶を受胎させることができるのは、ひとり人間だけである」[11]。番っている動物は「生殖器でしかふれ合っていないし、そこでしか快感も感じていない。（動物は）愛撫の力をほとんど知らない。逆立った毛で皮膚が覆われているからである」[12]。「想像することも、じっくりなにかを味わうこともほぼ皆無な」動物は、「粗雑な快感」と「ごく短いあいだのあがき」しか知らない。

人間は「あらゆるもののなかで最も官能に恵まれている」[13]。温血動物にもすでに、その以外の動物より「はっきりした媚態」によって準備され、点火される快感は存在する。哺乳動物はとりわけ強い快感を味わうことができ、「淫蕩な資質」をよりはっきり示している。哺乳動物の雌にはクリトリスもあるし、挿入も他の動物より深い。だが、肉体的にも精神的にも感受性がきわめて鋭く、無毛で「触覚が全身に広がって」おり「強烈な快感」[14]を受けやすい人間は、快感の頂点に立つ。人類において両性の関係はより完全、頻繁、親密である、とヴィレーは一八二五年に断言している。「無毛の皮膚が両性に対してより直接的な接近、より官能的な印象、より優しい接触を可能にして」[15]おり、それが「幻想能力」を高めている。人間の「皮膚はうまれつき刺激にきわめて反応しやすい」。そのうえ、「皮膚の機能を生殖器の機能に結びつける、あらゆる親和的な関係[…]が認められる」[16]とヴィレーは加える。そして、手を自由に使えることが、性行為において、人間に高い優位性を与えている[17]。しかも、動物に確認されているところとは違い、人間のあらゆる感覚は調和的に共振するのである。

動物とは逆に、「人間の想像力は、甘美なものであれ、苦悩に満ちたものであれ、あまたのイメージを（人間に）もたらし、それらのイメージはじっさいの経験以前からすでに苦痛も歓びも増幅させる」[18]。さらに、直立歩行によって、人間――とりわけ女性――の「血液はたえず骨盤腔に誘導され」、そのことによって性的感受性がいっそう高まる。動物の雌のばあい、膣は腹部に対して平行に走っているが、人の女性のばあい、膣は外陰部および子宮に対して斜めに走っているため、パートナーは動物のように「快感の局所」が限定されることのない体位で交わることができる。「人間は伴侶を抱き、快感に酔い、興奮の諸段階を辿り、〈官能の細部〉を知って味わい、いくつもの感覚で幸せになり、自らの持てる能力をすべて参加させて[…]最も重要な機能を行使する」[19]。人間があらゆる被造物のなかで最も惚れっぽいとすれば、それは結局、精子の分泌に必要な栄養分をよりふんだんに供給できる栄養補給が可能だからである。

人間の雄はたしかに、こうした優位と引き替えに、オルガスムの瞬間に高まるあの死の予感を味わわなければならない。男性は性交によって疲労を招き、その疲労が男性にとって消滅の予兆となるのである。もっとも、男性は消滅を加速させているわけだが[20]。

われわれが今読んでいる資料を書いた臨床医や生理学者たちは、「自然」の要求を実現しようとするさい動物と人間にいかなる違いがあるか明確にしようと試みたのち、欲望の高まりというところでつまずいている。欲望の高まりを主題にした彼らの言説は、観察の結果と曖昧な仮説を、いや非合理な仮説までもないまぜにして、たいがいが支離滅裂なありさまを呈しているのである。概して、観察可能なものと計測可能なもの、すなわち生殖器の状態に閉じこもっており、言説の最も大事な部分は器官の興奮、オルガスム、抑えきれない欲望、刺激という要素に依存している。欲望を持った男性の性器は勃起し、欲望を持った女性の諸器官は血液の大量流入によっ

て膨張する。そこに刺激、系のあいだの親和作用、勃起組織間の連絡といった仮説が加わる。

こうした血液と神経の作用を越えたところにひとつの疑問が生じてくる。これらを統括する指揮者ははたして存在するのか。それは大脳なのか小脳なのか。ところが、これら臨床医と生理学者においては、この疑問は、魂が備えた能力、とりわけ想像力と記憶力の役割にかんするきわめて曖昧な問題提起に導かれてしまう。情念を、彼らが研究する自然の作用を攪乱するものとして排除し、むしろ、両性の肉体的結合という芝居を演出する自然な感情について議論を長々と展開しようとする。

男女に〈欲望〉を授け、性差を認識させるものは自然である。男女が自分たちを分かつものを意識するやいなや、お互いを冷静に眺めることなどできない。「男は女のなかに、女は男のなかに、自らの不安を快感へと変えることのできるこの世でたったひとつのものを見る」[21]。「一方は他方のなかに、至福に至る手段と自分を補う存在しか見ていない。両者は、自然が種のために語りかけてくる力に応じた激しさで相手に身を投じる」[22]。「意志の力では御しがたい」生殖器は、欲望の自律性、あるいは「その気まぐれの厚かましい思い上がり」[23]とでも言おうか、それを強いてくるのである。

人間は快感と苦痛によって規整されるさまざまな欲求からできあがっているが、そのトップが種の保存を目指して媾合する欲求である。「健康な人間であればだれにでも、肉体的な愛の歓びを必要とする年齢がある」[24]。欲望は男性のばあいまずもって精子を「排出」したいという欲求から、女性のばあい生殖器とりわけ卵巣の鬱血からやってくる、とブルダッハは断言する。以上が「性的興奮の一般的な法則」[25]である。欲求が欲望を生むが、デキュレによれば、情念とは欲求の増悪すなわち「欲求の専横」[26]でしかない。しかし、欲求は「われわれの器官が働こうとするたびに」[27]現れる。要するに、欲望は「欲求を満足させることをより専門とする器官に欲求が与える初発の刺激から生じ、その強度は、人が欲求の実現に賦与する快感の観念におうじてつねに変化する」[28]のである。

肉体と精神の相互関係にかんする感覚論と観念学派（イデオローグ）の見解に従えば、ぜひとも読み解かなければならないのが欲望昂進のメカニズムである。彼らは、感覚的メッセージ――とりわけ第六感の印象や「生殖本能」[29]――が生殖器に与える作用と、こうしたやむにやまれぬ生理的衝動を受けて采配を揮い、想像力を始動させる大脳の機能の両者が、「説明のつかない相互依存」と「能動的な共感」作用のなかで組み合わされていると見ている。つまり、ここには複雑な相互作用が生じており、この相互作用のプロセスがどのように機能しているのかもっと理解すべきだと考えているのである。

医者たちは男性の欲望にあまり時間をかけていない。あまりにたやすく理解できるので、わざわざこだわるまでもないと考えているかのようである。性が違い、両性の形態、匂い、色、肉の固さ、皮膚の肌理において同じでないことが確かめられれば、走遊子をもつ精子の活動によると一部に考えられていた勃起が起こるには十分である。医者には、欲望が陰茎、とりわけ特定の触覚の中枢である陰茎亀頭への印象とオルガスムに集中的に現れているように思える。陰茎亀頭の皮膚はふくらみ、膨張し、それに伴って色合いが濃くなり、「より生き生きとした」[30]色調を帯びる。その結果、「穏やかな熱気」が生殖器全体に伝播するのである。

一八二四年、臨床医アドゥロンはペニスの勃起を精密に描写している。「その動脈は力強く脈打ち、その静脈は膨れあがる。血管を覆う肌は色づき、熱気が上昇する。それまで丸かったペニスがいまや三角形を帯びている…」[31]。勃起は、いまだ神秘に包まれたままの現象で、突如訪れることもあればゆっくりと徐々に訪れることもある。意志に従うことのない勃起は、はかなく、気まぐれで、「さまざまな度合いを取ることができる」。ほとんど同じ状態にとどまっていることができないので、挿入後、任務を完遂するまでは「いか

なる気散じも許さず」、「他の行為をすべて締めだそうとする」。アドゥロンによれば勃起は大脳の影響によって起こる。火のついた生殖の欲望が海綿体を刺激する。その一方で、ペニスと、いくつかの内的な共感を経由してペニスに結びついた生殖器すべてに直接的な刺激を与える。

ラルマン教授は描像を簡潔に描いている。陰茎亀頭の「感覚機能を備えた表面積の広い繊細な感受性」は、「他の器官にたいしてたちどころに支配権を及ぼ」す。「飛び出した」巨大「神経乳頭」によって生殖を遂行するのが陰茎亀頭の役割である。[32] コルベルトのかなり以前にラルマン教授はこう断言している。

同時に、愛撫が決定的な刺激を与える。いずれの性の個人にとっても、それは決定的な刺激である。「欲望に両唇はふくらみ、接近し、膨張し、色づく」。[33] 相互に与え合う愛撫は「性器が勃起するための準備態勢をほぼ間断なく」亢進させる。性器が聴覚と結ぶ関係はここまで直接的ではない。とはいえ、リュリエは声の扇情的な力を強調している。視覚のばあい、感覚的メッセージと性器との相互作用はより複雑である。美のイメージは興奮を誘うが、逆に、生殖器の状態が目に影響を与え、「欲望と、そのあらゆる陰影の特徴を表す最適な表現を眼差しに」与える。目はそのとき、いつにも増して「魂の鏡」[34]となる。色情狂の卑猥な目も、クレチン病患者の扇情的な眼差しも、このことをきわめて明瞭に示している。

一方、女性の欲望の高まりについて医者は際限なく論じている。ひとつめは、生殖器全般の解発因（リリーサー）の役割についての議論である。オルガスムや興奮による血液の大量流入が生殖器を膨張させ、これに赤みを帯びさせるが、それにより子宮と腰部が重く感じられる。それが原因でときおり表れる抑えがたい疼きは、自慰、膣への異物挿入、さらには女子色情狂にまで窮まる体の火照りを引き起こすにじゅうぶんだと多くの学者が考えている。この確信は、一七八五年、シャンボン・ド・モントーによって明確に述べられている。シャンボン・ド・モントーは外性器の疼きと子宮頸部の疼きを注意深く区別する。子宮頸部の疼きは一般に堪えがたいまで亢進し、「熱狂、怒ったような様子、胴体の捻り、下腹部の膨張」[35]を引き起こすことがある。こうなると、子宮頸部の熱を冷やしてして一時的に緩和することができるものとしては精液しかない。

ふたつめの議論は女性の欲望を発動させる解発因（リリーサー）が正確に言ってどこにあるのか、という問題にかかわっている。医者の大半は、クリトリスの果たす役割が大きいと主張する。この所見にはそれなりの重要性がある。というのも、われわれなら性感帯分布図と呼ぶであろうこの地図によれば、外的な性的快感は、子宮と膣の感覚とは無関係ということになるからである。したがって、女性は、男根や張形がなくても自分ひとりで、あるいは女性同士で性的快感が得られることになる。ヴィレーはこのクリトリス優位を強調する。ただし、彼はクリトリスと同時に唇と乳首も勃起すると指摘している。[36] モロー・ド・ラ・サルトも同じ立場に立つが、クリトリスの大きさは女性によってかなりのばらつきがあるという。「性的快感の味わい方にはかなりの濃淡と多様性」[37]があるのはそのためだと彼は考えている。この問題についてはまた後に見ることにしよう。ルノダンは『医学事典』の頻繁に引用される論文中で、クリトリスこそ女性の官能の主たる源泉だとしている。[38] デランドは、そもそも、クリトリスの切除によって女性は性的快楽を感じる能力が減退するのだから、この器官が以上のような役割を担っていることは間違いないという。[39] 後に見るように、その後リシュランもこの見解に賛同しており、ルボーは、クリトリスの切除が病的色情亢進を治癒したと繰り返し指摘している。[40] とはいえ、それだけでは官能の源泉をほんとうに涸らすことにはならない、とルボーは考える。

というのも、それまでの少なからぬ医者と同じように、ルボーもまた、性的快楽の解発因（リリーサー）となる器官が他にもあるのではないかと考えていたからである。その証拠に、夫婦は、陰茎がクリトリスに

接触できない体位で交わることがあり、「にもかかわらず女性が不満を持たないどころか、より強い官能に達しているふしがある」[41]。それどころか、ルボーが本人たちから直接証言を得たところによれば、「クリトリスへ与えられる軽い刺激にはまったくなにも感じず」、「陰茎その他の物体で膣壁を擦る」[42]ときにしか快感を得られない女性がいるのである。自慰を行う女性ががかなり多いということが、この意見を補強している。

クリトリス優越説に傾く者は、クリトリスがあまりに開発されると、女性は「男性の愛撫に無関心になり」[43]、「想像力の暴走」によって倍加された「クリトリスの官能」を女性とともに追い求めたいという抗しがたい欲求に屈する形で同性愛にのめり込んでゆく、とはっきり指摘する。ただ、マンヴィル・ド・ポンサンが指摘するところによれば、幸いなことに、「この器官の切除は通常、女性を自然の嗜好へと連れ戻し、妊娠へと仕向けてくれる」[44]。

したがって、外陰部――小陰唇――、膣壁、膣壁を覆う小さな生殖腺、これらが欲望の亢進と快楽の解発（リリース）に与っていると考える医者は存在した――この点については後でまた触れることにしよう。ハラーの権威に従うミュラは、外陰唇とともに膣に大きな役割を認めている[45]。女性性器研究を専らとした偉大な臨床医のひとりユギエは[46]、膣内分泌物の過多と欲望の強さとの関係および特定の生殖器病の出現との関係を理論化している。一八四三年と一八四五年のあいだに発表された、女性の快楽にかんする彼の有機体論的理論は、この生殖器病が惹起する分泌、火照り、炎症を根拠にしている。ユギエによれば、いましがたふれた抑えがたい掻痒感を媒介するばあいとくに、この生殖器病だけでじゅうぶんに欲望を亢進させることができるという。過剰分泌の支配下にある女性の官能が熱せられると、女性は不規則な性に耽ることが多い。

コロンバ・ド・リゼールはクリトリスと外陰唇は同時に活動しているという見解に傾いており、女性生殖器から快感を感じる能力を奪う危険を冒さないためにも、外科手術のさいにはどの女性生殖器も丁寧に扱うよう求めている[47]。要するに、あまり白黒はっきりさせるべきではないというわけだ。当時の臨床医は欲望と快楽の源泉にかんして、必ずしもクリトリス派と膣派のいずれかにきっぱり分かたれているわけではなかった。ただ、コベルトがこの議論に参加する以前は、高ぶり、オルガスム、火照り、疼き、劇的な亢進にだれもが極端な重要性を与え、こうした現象が解発（リリース）しやすい病気を延々と列挙するに留まっていた。過剰と乱用にたいして当時の医者がなぜあのような態度を取っていたのか理解するためには、こうして延々と列挙された病気をぜひ読まなければならない。

以上の理路に沿って、デランドのような臨床医のなかには、欲望の突発的亢進に再び重要性を認めようとする者が出てくる。「生理に先立つ期間と生理中の興奮によって淫蕩になる女性が多いことはよく知られている[48]」と彼は声高に主張するが、これは雌の動物の発情期を思わせる。デランドによれば、卵巣もまた「この種の興奮の発生源[49]」である。雌は卵巣の動脈と静脈が太いために好色になりやすいと考えるのである。なにかの都合で卵巣を摘出すると雌は性行為にたいする興味がすっかり失われる。家畜の去勢師はそのことをよく知っていて、ある去勢師など、あまりに淫蕩な娘にうんざりして、卵巣摘出手術を受けさせたことさえあった。これが「模範的な行動[50]」といえないことはデランドも認めてはいるが。

欲望の高まりは、女性生殖器や共感によってそれらと結びついた乳首ばかりに、いつまでも閉じ込められたままではいない。反応の放散作用によって感覚的印象があちらこちらに伝播し、他の多くの器官も「いっせいに震える」にいたる。子宮の共感的放散を認めない医者がいないのはこうしたことによる。その代わり、身体の一部へのわずかな接触でも子宮に影響を与える可能性がある。早くも一八二二年には、ハイデルベルクのフリードリヒ・ティエデマンが、神経経路の研究によってこの放散を説明しようと試みている。

残るは、生殖器に局在する神経だけでこうした官能の印象が伝達できるか、という問題である。リュリエは一八一七年に『医学事典』のなかで「気持ちや観念の影響をこれほど敏感に感じ取る器官は他にない[51]」と断言する。生殖器におよぼす想像力の影響は決定的である。生殖器は好きな対象のことを思うだけでそそられ、「嫌いな対象のことを考えるだけで冷や水を浴びせられ［…］、悲しみ、恐怖、臆病によって縮み上がったり縛られたりする」。女性のばあいも、分泌のリズムと強度が示すとおり、子宮と乳房は感情の影響を受け入れている。それでも、この影響がいかなるメカニズムによって作用するのかはリュリエにとってなお謎にとどまり、「生殖器系の末梢神経が神経中枢にある種の反射を与えるというきわめて曖昧かつ不確実な仮説[52]」と精巣や卵巣の分泌物が染み込んだ血液によって大脳が刺激を受けるという仮説のあいだで揺れている。

この数年前にカバニスはもっと断定的な言い方をしていた。カバニスによれば、きわめて鋭敏な感覚を備えた生殖器は、大脳中枢にとりわけ強烈な作用を及ぼす。というのも、「いずれの性においても、生殖器の神経は」さほど太くないにもかかわらず、「さまざまな多数の神経から成り立っている[53]」からである。生殖器の神経は、共通の場として働く交感神経系によって、それが働きかけることのできる「神経系全体のうちで最も重要な分枝」を通じて作用を及ぼす。しかも、カバニスによれば、本来の性感の本源たる生殖器――精巣と卵巣――は腺状組織である。ところで、あらゆる腺はお互いに連絡を取り合っている。しかも、腺の状態は「大脳の状態に大きな影響を与える[54]」。したがって、生殖器は結局「感覚器官全体、および、生殖器と同じくらいきわめて敏感でこれと直接的な共感関係にある他の器官に、強い作用を及ぼしているにちがいない[55]」。腺系がいかに重要視されていたかは、性的快楽、とりわけ初期の性的快楽が女性頸部の膨らみを決定するという古代の見立てからも伺える。また、リュリエは、腫れたり膿瘍になった頸部の腺が、結婚後まもなくして、「夫の抱擁を受け入れたり、拒絶したりするのに応じて[56]」大きくなったり小さくなったりした若妻の例を引いている。

ガルによれば、「発情期を司る場所」は大脳ではなく小脳である。ガルの弟子たちにすれば、小脳こそが「性器を司る立法者」であり、「繁殖本能の本源」であり、一言でいえば、「性愛の本拠地」であった。したがって、小脳の容量が生殖欲の強度と関係しているという断言は筋道が通っているように思える。ところで、ガルと弟子たちによれば、小脳の容量は〈頸部の〉長さや〈膨らみ〉を見て外部から知ることができるという。ということは、このような特徴を持った個人は、その好色さにおいて抜きんでている、ということになる[57]。

ガルの一連の観察がこの理論を補強している。また、この理論にかんしては、ショファール博士が記録したある症例が再三再四取り上げられている。敬虔で慎み深く品行方正な三十三歳の男性が倒れた拍子に、運悪く後頭部をベッドの角で強打した。ところがこれによって男は常軌を逸した好色になってしまった。「男は妻や娘ばかりでなく、すべての異性につきまとうようになった[58]」。この妄想は三ヶ月にわたって悪化し続けた。ある日、妻に関係を拒否されて強い怒りに襲われ、この哀れな男はひきつけを起こした。すると苦痛は場所を変え、エロティックな妄想は宗教的な熱狂に取って代わられたという。

したがって、ショファールもヴォワザンもロンドも、そしてデランドも、過剰な好色を治療しようと思ったらとくにうなじに氷を当てるか、そこを蛭に吸わせるかして、小脳に働きかけるのが良いと考えていた。

以上のような性的解発因（リリーサー）の位置標定は、一方で、とりわけフルランスとブイヨーから強い反論を浴びている。ウィリスは、ガルが小脳の研究を発表する以前、生殖欲が脊髄にあるとしていた。ウィリスによれば、脊髄は精子の分泌・排泄器官、陰茎の勃起、より広く

は「性感」[59]にちょくせつ作用する。たとえばドゥピュイトランは、持続勃起症が脊髄の病巣に由来すると見なしている。またデランドが、男子色情狂患者にたいし、腰部に吸角を、肛門に砕いた氷と蛭を当てる一方で、脊椎に沿って冷水を浴びせるように奨めているのはこのためである。

注目したいのは、以上の医者たち全員が、体型、気質、特異体質などによって性的欲求の強さには幅があると考えていた点である。各人に固有の「性器の感度」がある、すなわち、「性器感覚」にはその人なりの感受性が備わっており、好色にはその人なりの度合いがあるわけである。臨床的な診察によって患者各人の気質を見分け、定期的な自己観察を命じて患者自らが己の感受性を評価できるようにさせることが、これ以後、医者の任務のひとつとなる。これによってはじめて臨床医は患者の欲望の激化を回避し、適切な程度に収めることができることになるのである。

理解を深めるために、一例として、ルイエ=ヴェルメが『医学事典』で素描した性的欲望の特に強い女性の臨床描写を見てみよう。淫乱が疑われる女性は「神経系が優位にあり、筋肉がきわめて発達しており、蜂巣状組織が少ない」ばかりでなく、加えて「体毛系が発達していて色が濃く、髪、睫毛、体毛ともに豊かで漆黒である。目も同じように黒く大きく生彩を放ち、表情は表現力と動きに富んでいる」。「性的器官〔性器、乳房、尻〕が張り出し、乳房もどっしりとして固く均整が取れている。腰はきゅっとくびれ、骨盤は広がり、突出部分は丸みを帯びている。腹部はよく発達し、全身がすくっと伸び［…］」「口は大きく、唇は厚くて鮮紅色をしている。歯は白く健康で歯並びが良い」[60]。生まれつき淫奔な女性を描写したこのような記述にいかなる一貫性があるのか、読者にはよく分からない。ただ一点、描写された女性がそれを書いた人物の趣味に一致しないということだけを別にすれば。

欲望はまた想像力と、観念学派（イデオローグ）が詳述した心的諸能力総体の働きに反応して高まる。リシャールは、デステュット・ド・トラシの『観念学要綱』に着想を得て、一八一一年、この心的諸能力を列挙し、記憶、観念連合、比較、判断、推理としている。欲望の刺激を受けたこれらの能力が高揚すると情念になる。「感じるとは［…］、ある印象を意識すること、記憶すること、経験した印象の記憶を感じることである。判断するとは、われわれの知覚のあいだの関係を感じ取ることである。そして望むとは、なにごとかを欲望することである」[61]。感覚、記憶、判断、欲望は互いに結びあいながらあらゆる観念の複合体を形成している。

性的快楽の濫用などを断ち切った場合にいかなる結果が生じるか、という主題で博士論文を書いたラブリュニは、「欲望に先立ち欲望を開花させるばあいであれ、欲望のあとに現れ、欲望によって呼び覚まされ、掻き立てられるばあいであれ」[62]、快楽の真の源泉は想像力だと考える。情念から糧を得た想像力が、今度は情念に働きかけ、想像力が情念を強化する。想像力が情念を高揚させるのである。「たび重なる性的歓びの重圧に押し潰されると、われわれの感覚は新たな快感を得ることができなくなる、その一方で」[63]われわれを突き動かし愛の快楽を欲望させようとするのが想像力である、とフルニエは断言する。この点こそが、人間と動物を分かつ。

「初めて官能を与えてくれたイメージ」[64]からしばしば生じるモデルをだれもが自らの裡にひとつ持っていて、自分に強い印象を与えてくれる対象が現れるとそのモデルと引き比べている、とすでにルーセルは断言している。フルニエはこう指摘する。「美女を見たときに引き起こされる興奮、美女を所有したときに味わった快楽の記憶によって引き起こされるこれまた強い興奮のなかに知的諸能力が高揚した結果が見られることは、思考する器官が生殖器にいかに強い作用を及ぼしているか［…］［そして］生殖器が自我の決定にいかに大きな影響力を及ぼしているかをあますところなく示している」[65]。そればかりか、エロティックな夢を生みだしているのもまた

想像力である。この点について、医者と哲学者は、道徳神学の専門家とほぼ歩調を合わせている。もっとも、道徳神学の専門家とは反対にモレル・ド・リュバンプレは、晩の勃起を容易にし、夜射出される精子の生成を助けるために昼間のうちに想像力を高めるよう奨めているが[66]。

不節制、乱用、不能、冷感症を治癒したい医者たちが、想像力の制御と高揚に大幅に依存した一連の治療法をいかにして開発しえたかについては、後に見ることにしよう。感じる能力、想像する能力、考える能力、この三つの能力に同時に働きかけたいという医者の意思は、感覚の訓育、豊かな薬局方、運動と体操、食事療法と健康的な生活習慣の実践、そして広くは、神学者の戒律を思わせないでもない道徳教育によく表れている。治療しようとする不品行が女子色情症であれ、男子色情症であれ、「未成熟な快楽」であれ、若い既婚女性における性交の過剰であれ、放蕩であれ、若い男女の自慰であれ、それは変わらない[67]。

欲望のメカニズムにおいて羞恥心がいかなる役割を果たすか、われわれはこれまで触れてこなかった。しかし、羞恥心は当時きわめて重要な要素であった。男性の自然の興奮をいっそうかき立て、精子の生産を助け、繁殖力豊かな射精を行うための必要条件である男性エネルギー誇示を促すために自然が仕組んだ戦術の総体として、医者はこの羞恥心という感情を理解している。まるで最終的な明け渡しの時につく高値のように、障害による欲望の高揚はここにきわめて重要なものとして立ち現れる。身を委ねるまえに女性が見せる抵抗は、パートナーの貞節にかんする男性の不安を鎮めるだけになおさら重要である。したがって、医者の目からすると、女性の羞恥心は自然なふるまいであって、策略の結果ではない。

媚態と結びついた羞恥心は「欲望の活力を強化させるために[68]」欲望を妨げる。以後数十年にわたって問い直されることのないこの医学的言説の基礎を、ルーセルはルソーに着想を得て確立する。羞恥心は「持続させる」ことを任務とする。対象の価値を押し上げ、対象を渇望する者の情熱をいや増しにするのである。欲望と障害のこの必然的な戯れは、欲望の素材を準備し、他者にたいする高い評価を生じさせる。よりよく降伏するために逃げ去る女性の側からすれば、羞恥心はたしかに、「自らが対象となり、自らがかき立てようとしている他ならぬその欲望に圧倒されることの恐怖[69]」を隠そうとする隠蔽工作に近いものを含んでいる。したがって、この隠蔽工作にはほんとうの内気さ、弱気が混入しているのもまた事実である。だが実は、女性の抵抗を情熱的に欲しているのは男性の方なのだ。男性は「すべての障害物を退け、連戦連勝を重ね［…］、すべてを足下に組み伏し、あとは快楽を得るだけになったきわにあっても なお、突如として立ちはだかる障害に出会いたいと思っている。最も通過したい通路が閉ざされることを望んでいるのである[70]」。要するに、羞恥心の最良の証拠であり、したがって男性の興奮を頂点へと押し上げてくれる処女膜が庇護されていることで、羞恥心はなおいっそう美化される。快楽を遅延させる障害はいかなるものであれ欲求をかき立てること、性的快楽は浪費されなければされないほど強烈であること、以上はこれらの医者たちが繰り返し述べるところである[71]。

羞恥心には他の利点もある。ヴィレーによれば、羞恥心によって女性は「男性を疲弊させ、害する（ママ）」のを妨げるからである。女性は「いつでも受け入れ可能」な状態になっているはずである以上、羞恥心というこの称賛すべき感情がなければ、男性はいつ疲弊するともかぎらない。羞恥心は女性に権力を与える。「男性に屈服する権利を手放さなければ、実力行使によって男性に反抗するばかりでなく、弱さによっても（男性を）服従させることができる[72]」のだから。

欲望の素材の準備を促すこうした美徳の証明は、男性が妻や愛人と初めて性交するさいとりわけ必要になる、とモレル・ド・リュ

バンプレは断言する。男性はこのとき「暴力による甘美な満足」[73]を女性に与えなければならないからである。いずれにせよ、羞恥心、慎み、とりわけ抵抗は、古き良きカリペディア〔美しい子どもを産むための術〕の観点からすれば決定的な重要性を持つ。事実、カリペディアには欲望と快楽の洗練された管理術が含まれていた。モレル・ド・リュバンプレはこう書いている。「世の妻たちよ、愛想のたたき売りは控えて、甘美な犠牲の瞬間をできるだけ延期なさい［…］みなさんのその賢明な慎みによって、力強く活力のある成分に満ちた液体だけをあなたに供給できる状態に夫を保つよう、つねに心がけなさい」。「みなさんがこれから社会に送り出す新しい生命の活力とエネルギーの大部分が依って立つべきこの力強い性的興奮」[74]にこそ、その秘訣はあるのです。

〈「良き性交」のための諸条件〉

医者が、自分の目から見た良き性交をいざ描写しようという段になると、詩才を発揮しなくてはいけないと感じてしまうのもやむを得まい。その点で、男性の性行為を、さながらツチボタルの幼虫のように光で透かして観察できないことにモロー・ドゥ・ラ・サルトは不満を抱いている。どの専門家も一致して、性交とそれに必要な強度、その得も言われぬ歓びを讃えると同時に、性交にともなう危険、性交と死との関係もまた暴露している。快楽を敵視し、快楽の洗練にほとんど関心を示さなかった「ヴィクトリア朝」的な観念をここで一掃しておくとしよう。男性と女性の肉体的結合の波乱に富んだ描像によって、われわれは当時の臨床医学と生理学の核心に迫ることができる。

一七七〇年から一八二〇年中葉まで、この詩的レパートリーは生気論の優勢下にあった。充溢した強烈な生存は「愛と生殖の時」にしか見いだせない、とヴィレーは断言する。性交するとは「生存の充溢を味わうこと」[75]である。したがって、アリストテレスが忠告するように、全身で快楽を味わい、決して「他のことを考え」ながらいい加減に行ってはいけない。動物は「全身全霊で」[76]番っている。勃起とは実は、個人のものではなく、種のものである。そして、ときおり勃起が阻まれることがあるとすれば、それはおそらく、欲望を引き起こす素材の質が良くないからだ。意志の命令に従おうとしない性器にかんしてアウグスティヌスが定式化した謎に、ヴィレーはこうした解を出す。しかし、この得も言われぬ快感は死を予示し、死と隣り合わせにあることを繰り返し言い添えておこう。自らの死を加速しつつ生命を与えることが、女性の二重の使命に他ならない。子どもを産むという行為は、自らの命を縮め、「いわば遺書を制作して死に備えることである」[77]。快楽の強度は、このとき、こうした死の意識を緩和するためにのみ存在する。雄が真に味わっているもの。それはなににもまして生命の伝達なのである。雄が愛しているのは「女性ではなく、女性がその保管者にすぎない新しい生命」[78]、女性から発せられるはずの存在に他ならない、とヴィレーは断言する。

モレル・ド・リュバンプレが先頭を切ってこの賛歌を歌う。「人生を謳歌する」とは、生殖器の機能を十全に満たすことである。「生命を伝播するための行為は［…］、いかなる表現によってもその観念を伝えることのできない心地よい感覚を両性に経験させる。生理学の医者ならだれもが認めるあれほど大きな重要性を、この行為に与えているのは、セックスの快楽（ママ）のこの抗しがたい魅力である」[79]。モンテーグルもまた、性交は男性に「味わいうるかぎり最も強い歓喜」[80]をもたらすと断言している。

より重要性の低い博士論文からもこうした調子が聞き取れる。ということは、博士論文の審査委員をしていた大家たちもこうした調子を直接耳にしていたのだろう。ビロンは『医学事典』で、性交が「生きてあることに価値を与える」ものであり、「生殖行為の完遂」

から生じる歓びは、「栄養摂取の機能に起因する歓びと比べものにならないほど激越」であると断言している。味わうことのできるすべての者に快楽が等しく分け与えられているという点で、性交の歓びは人権の平等を表しているとビロンは考える。「それだけで感覚能力全体を巻き込むほどの」性交の興奮は、「人が増殖させ、永続させる生命のありとあらゆる力を掻き集め、〈ある一点に〉、そして〈ある一瞬に〉投入する」[81]。

しかし、そう考えると、真の快楽は自然にかなった快楽しかなく、それ以外は偽りのまがいものでしかない、とユゲットは力説し[82]、返す刀で、節欲、自慰、肛門性交、獣姦を拒絶する。

フルニエ教授によれば、性交とは「〈同じ種〉に属し、〈性の異なる〉二個人間の愛に満ちた結合」であり、したがって、獣姦、肛門性交、女性同性愛は除外される。「性交は、われわれの感覚が一定のオルガスムに達し、われわれの想像力がある種の酩酊に達したときに引き起こされる〈自然な行為〉である。それは、人間という〈種〉の伝播を保証するために、自然が〈各個人〉に命じる、〈うむを言わさず〉、抗うこともできない〈欲求〉である」[83]とフルニエは付け加えている。

以上の前提に立って、医者は良き性交の諸条件とはいかなるものか、しきりに頭をめぐらせる。まず、性交が行われるべき場の全体的な環境である。フォデレは書いている。「良い性交が行われるためには、心遣い、落ち着き、静寂、秘密の保持が必要になる。騒音、不安、恐怖、衆人環視、自信のなさ、嫉妬、軽蔑、嫌悪、不潔、尊敬過剰による距離などが、まるで魔法の杖のように、性交を遮断する」[84]。

人目を忍ぶ快楽を高く評価するというもうひとつの伝統も、たしかに存在する。リュクルゴスはラケダイモンの若い夫婦にこの種の快楽を命じていたが、この例を引く著者は多い。したがってふたつの場所が対立している。ひとつはもちろんベッドであり、ベッドの長所については倦むことなく繰り返し述べられている。もうひとつは人目を忍ぶ愛を可能にする場所だが、それについて医者はあまり関心をもっていない。

田舎から出てきてパリに滞在する若いカップルや、熱帯地方に行くヨーロッパ人のように、新たな土地を滞在地に選ぶばあい、媾合のまえに「順応すべき」[85]気候を尊重すべきである、とデランドは言う。また、伝染病の流行中、病後の静養期、睡眠不足のときにも性交は控えるべきだとしている。医者が性行為の場所についてさほど長々と論じないのは、性行為のタイミングの重要性を強調したいからだ[86]。デランドは解剖学の大教室や病院の待合室を頻繁に訪れたときには番わない方が良いとしている。自慰をしたばかりのとき、過剰な労働をしたとき、悩み事、後悔、悲しみなどを抱えているとき「の性行為もまた、かなり受け入れ難い」[87]。困窮状態にあるときや不潔なときは言うまでもない。

パートナーが生理中のばあい性交はできるのだろうか？　それまで何世紀にもわたって人々の耳目を集めてきたこの問題は、もはやほとんど議論の俎上に載せられていない。過剰な性交を慎むべき期間はあるものの、医者は以前のように禁忌をふりかざさなくなった。ただ、妊娠期間の性交については以前よりも注意を促している。古代人たちは、妊娠中の女性が性交に伴う震えによって「被るおそれのある混乱」を強調している。ヒポクラテスも禁欲を奨めていた――ただし、アリストテレスは例外的にそうしていないが。というのも、性行為が、妊娠に起因する子宮の例外的な多血症を増悪するからである。しかも、性的快感によって子宮の感受性が「激化」し、それが原因で出血、痙攣、収縮、硬性癌、とりわけ早産が引き起こされる危険がある。一八〇三年、モロー・ド・ラ・サルト[88]は、モリソー、マオン、その他前世紀の多くの医者に倣って注意を呼びかけている。「性交の闘い」と「愛と快楽の瞬間に起こる震え」によって女性の下腹部が収縮するために、胎児は苦痛を被って

いる。「官能の絶頂が全身の調和に招く混乱」[89]については言うまでもない、とカヤールは考える。だが、クルビーはこう付け加える。愛の快楽が妊娠した女性に引き起こす混乱がいかなるものであれ、熱くなりやすい体質を授かった女性から快楽の機会を奪うことになるとすればまことに遺憾である。全面的な禁欲を行えば、こうした女性の習慣はあまりにも損なわれるが、その一方で、「節度ある性交」なら、女性に重大な不都合を引き起こす危険はない[90]。

概ね以上が十九世紀の医者の一般的な意見である。これと意見を同じくし、官能の痙攣によって流産の危険があるため「夫婦の抱擁」のさいにはじゅうぶんな節度を保つよう要求するユゲットも、「妊娠した女性は性行為への嗜好が高まるのを感じる」ことがあり、完全な禁欲を要求することは不可能だと認めている[91]。こうした理由から、モヤール医師は、「生殖器の興奮」を惹起するあまりに柔らかなベッドは避け、官能を刺激するようなものを視界からいっさい遠ざけるよう忠告しているが、同時に、全面的な禁欲は「非人間的[92]」であるとも認めている。とりわけモヤール医師の念頭にあるのは、強い性的欲求が妊娠によっていや増しになる若妻である。モロー・ド・ラ・サルトと同じく、モヤール医師は、子宮が妊娠期間の活動に必要な活力に恵まれていない粘液質の女性には、官能の痙攣が有益なばあいさえあると考えている。したがって、神経質な女性において性交が惹起する過敏症を、粘液質の女性が危惧する必要はない。とはいえ、妊娠期間中に夫が別の場所に快楽を求めに行くことを恐れて、嫉妬から夫婦関係を迫る妻がいることをカヤールは嘆いている[93]。

一八四三年、コロンバ・ド・リゼールは、妊娠直後の数ヶ月間は「夫婦関係」を禁ずべしという結論を出している。ただし、両性ともにきわめて強い欲望を感じたときだけは別で、そのときは、欲望を控えめに満足させる方がむやみに欲望に逆らうより不都合が少ない。ただ、この時期以降は手加減せず性交に没入できる、と書いている[94]。この三年後、マンヴィル・ド・ポンサンはこの意見に賛同するが、同時に、胎児に悪影響を与えない体位を取るよう夫婦に忠告している[95]。

より興味深いのが、子どもに授乳する女性が取らなければならない態度にかんする発言である。ふたつの快楽の関係に関わっているからだ。子どもに乳を与えているとき女性は性的快感を感じている、とたいがいの医者が考えている。バルザックはこうした共通認識を繰り返しているにすぎない。一八一一年、リシャールは権威者然とこう書いている。「乳首に与えられる軽い刺激が引き起こす乳房の勃起と、こうした興奮が惹起する引きつったような痙攣性の反応が高まって、女性が液体を一定距離飛ばすほどになることがある。液体の射出が続いているあいだ、女性は乳房にある感覚を感じており、その感覚には必ず官能が伴っている[96]」。勃起から射出と性的快感へ導くプロセスに気づいたのだろう。動物の雌は「自らが満足する感覚」を得させてくれる子どもに好んで乳を与えようとすることを、ボルドーに続いてリシャールも加えている。

子宮と授乳器官は共感で緊密に結ばれている、とマンヴィル・ド・ポンサンは断言する。「一方がある感覚を覚えれば、もう一方には必ずそれに似た感覚が引き起こされる」。彼もまた、「液体を遠くまで射出する」乳首の勃起について言及し、初めての授乳が始まったばかり患者の言葉を引用している。「わたしは電気的な火花が散ったとしか言いようのないの衝撃を感じました。その衝撃は火花のように激しくわたしを高ぶらせ、子どもへと駆り立て、やがてうっとりとするような興奮となってわたしの体じゅうで開花しましたが、その後、得も言われぬ官能は鎮まりました[97]」。一方、リュイエが改めて指摘するところによれば、いくにんもの乳母が強い快感を経験しており、生殖器がその快感を一定程度分かち持っていることをカバニスに告白している[98]。「子どもに乳首をくすぐられ、吸われることによって、程度の差こそあれ、官能的な感覚が生殖器を刺

激することを知らない者はいない」とコロンバ・ド・リゼールは一八四三年に書いている。[99]

だからといって、授乳している女性は性的快楽を奪われなければならないのだろうか？　母親や乳母が「性交の快楽に耽った」直後に子どもに乳を含ませると、まるで痙攣が伝するかのように、子どもがひきつけの犠牲になることをおそれて止めるよう忠告する著者もいる。しかしデランドは、好色な女性が乳母としては不適切であることは認めつつも、たいがいの母親は夫婦の営みを受け入れても不都合はないとしている。要するに、歴史人口学の専門家たちがあれほど力説しているタブーは、あまり守られていなかったようである。それどころか、ボノーム医師は、泌乳期の女性から快楽を奪ってはいけないという。[100]ところがその一方でコカンは、その控えめな博士論文において、授乳している女性は――自慰に耽りがちな若い女性や妊娠した女性、性行為の過剰によって引き起こされた病気を抱える女性と同じように――扇情的な画像を眺めたり、欲情をかき立てる淫らな本を読んだりすることは避けるよう忠告している。「母乳の分泌にとって好ましくない影響を生殖器に与える」[101]からである。こうした女性にとって、夜、小説を読むことが最も良くないという。

カピュロンのばあいもっと厳格である。授乳をしていながら激しい情念の虜になっている女性は嬰児殺しを冒す危険がある、と彼は考える。[102]しかも、アガラクシア――無乳症――は過度な性的快楽によって惹起されることがある。極端に淫奔な女性をのぞき、授乳を望む女性は性交の快楽を断念しなければならない。したがって、性的なオルガスム（ママ）のあと、乳を含ませるまえには、興奮を抑え、体が鎮まるまで待つ必要がある。[103]その反面、女性が母乳の過剰に悩むときは、性交と下腹部の器官の行使――両者は同じ次元で扱われている――が、「乳房に集中しがちな体液を［…］逸らす恰好の迂回装置」[104]と見なすことができる。

新ヒポクラテス学派の影響とニコラ・ヴネットの古き良き著作が、性交にふさわしい瞬間ではなく、性交に好都合な季節や日や時間にかんする処方を相変わらず提供している。古代医学は、概して、暑さは寒さよりも欲望の高まりに好都合だと見ている。ヴィレーその他多くの著者によれば、南欧の女性が北欧の女性よりも官能的で、どの女性も冬より夏により惚れっぽくなるのはこうした理由による。いずれにせよ十八世紀末の医者の目からみれば――医者たちはここに至ってもまだルクレチウスを頻繁に参照している――あらゆる動物の行動が明らかに示すように、春こそが房事に最適の季節である。こうして自然の光景を参照する態度は、ことあるごとに見られる。ブルダッハの確言するところによれば、上流社会のさる貴婦人は、「五月が過ぎると、過ちを犯さないよう引き締めてきた気を緩めていた」[105]と打ち明けている。

欲望には暑さが好都合にみえるとしても、受胎には都合が悪い。逆説的なことに、北で交接した女性は南で性交した女性よりも容易に受胎する。暑さは大量の発汗を促すので、神経を弛緩させすぎるのである。したがって、妊娠の確率を高めたいなら、夏は快楽の規準に則って考えない方がよいということになる。夏の快楽が冬の快楽よりも長いように思える人がいるとすれば、それは他でもない、暑気によって器官が弱っているからである。その理屈でゆけば、秋は夏より人口の増加に好都合だということになる。リニャックが断言するように、秋には「器官がふたたび元気を取り戻す」[106]。なるほど、都市生活者は媾合の季節に冬を選ぶ。だが、この選好は自然の誘導に応えたものではなく、人工的なものである。冬には暖房が自然に反した熱を身体に伝え、官能がその熱を利用するのだ。富者、とりわけ情熱に駆られた富者は、このとき、「大気と人間の関係を支配する調和を断つ」[107]べく仕向けられる。性交に好都合な季節をめぐる古代の伝統は、当時大成功を収めていた大気論（aérisme）の影響を受けて強化されていたのである。

性交の日時にかんして、当時の医者は、古くからの紋切り型を繰り返していたにすぎない。ヴネットと香具師たちがこの紋切り型を詳述しているが、それは科学的知見をほとんど含まず、むしろ、民衆の良識に訴えてかけていた。周知のように、当時多くの分野、とりわけ気象学は、まったく性質の異なる知の地層に覆われていた。快楽にとりわけふさわしい時期について弄されていた忠告もまた、事情は同じである。

いくにんかの医者は、ニコラ・ヴネットの教えを敷衍し、この十八世紀末に依然として、食後すぐの媾合をしないよう忠告している。リニャックはこの禁止を、「快楽がもたらす情熱」が消化を妨げ、「なんらかの遅れ[108]」を引き起こすという意味以外には理解できないと述べている。肺結核患者は食後すぐの媾合をひかえた方がよい、なぜなら胃の充満が呼吸を苦しくさせるからだ、と考える者は多かった。

休息に有利な夜の媾合を奨める者もあれば、いわば春に対応する夜明けの方を奨める者もあった。夜明けは健康な職人に絶好の時間帯だとヴネットは断言する。職人は快楽に身を任せたあと仕事に出かけるが、一方、妻は横になったまま「今夫から預かったばかりの貴重品を保管しておく[109]」ことができる。昼間にしか真の快楽を得られないという男性もいて、彼らは、陽の光と欲望に火をつける刺激物を必要としている。もし夫の昼間の愛撫を拒否したら、「彼らの妻たちはほとんど愛の証を得られないことになるだろう[110]」。

リニャックはきわめて寛容な考え方をしていたが、それでも警告はいくつか発している。たとえば、職人は「快楽の妨げになるような疲労を肉体が強く感じたとき、官能に耽るために」仕事を放棄するようなことがあってはならないと言う。だが、「日中散漫になった精神が少し休んで回復できるなら、妻への愛撫に身を委ねてもうまくゆくだろう[111]」。

この世紀の変わり目には、生活様式、知的レベル、職業、とりわけ個人の気質による適性と選好の多様化を意識せざるを得なくなっていた。この分野においては習慣の役割が大きく、習慣によって官能が増すとリュイエは強調している。カバニスと少しまえのティソに続いてリュイエは、多くの同業者とともに、文人と学者は性欲の「明かな減退」の犠牲になっていると考える。大脳の緊張が「生殖器の生命に〈横道（ディヴェルティクルム）〉のようなもの[112]」を設けるからである。運動選手もまた生殖能力の減退に悩む。これにたいし、有閑階級の人間や怠け者、とりわけ白痴は生殖器が並外れて大きく、きわめて淫奔である。白痴は「獣のように惚れやすい」とヴィレーは考えている[113]。要するに、筋肉の活動も大脳の活動も欲望を緩和し、性的快感を弱めるのである。同様に、客を取りすぎる娼婦もこの分野における「感覚麻痺」に悩んでいる。

医者はこれ以降、性行動の個別性を強調するようになる。房事のタイミングに一般規則などない、と外科医リニャックは断言している。重要なのは、「性的快楽を必要とする明かな徴候」そのものを待つことである。「適切な状況が快楽に作用をおよぼし」て妊娠へと導く「季節、日、そしておそらく時間さえも[114]」各個人によって異なる。生殖に好都合なタイミングの追求は、個人の気質、生き方、気候に即した愛し方をもたらす。したがって、インドでかつて行われたように、太鼓の合図でいっせいに「結婚の義務」が命じられるなど、もってのほかだ。性交とは「自由で、何物にも依存せず、気まぐれで、ひとりひとり違う気質を除けばすべてに抵抗を示すことさえある」機能を満たしてやることだからである。それゆえ、いつも同じ季節に子どもがうまれるカップルがいても驚くにはあたらない。

したがって医学書は、房事の間隔にかんする一般的な忠告にはごく軽くしかふれていない。たしかに不節制を避け、夫婦のベッドを出てからもその後の力と、反復を容易にする軽い欲望をつねに保ち続けるよう留意すべきではある。しかし繰り返しになるが、房事の

リズムは、欲求の強さや気質や体質によって決まる。性的能力は個々人によって大きく異なるのである。医者が古代人の忠告を繰り返すときいくぶんなげやりになるのはこのために他ならない。ゾロアスター教は性行為の間隔を九日と決めている。ソロンは月三回を好んでいた。より自由だったムハンマドは週に一回を奨め、ヴネットは月三・四回の関係を推奨している。ハラーとブルダッハは、週二回の媾合がほどよいところとみている。[115] くりかえすが、不節制をぜひとも避けなければならないのは男性の方である。女性にとって危険はそれほどでもない。

臨床医は性的能力の追求を警戒すると同時に、逆説的だが、男性の日記にあらわれるあの性交回数への関心にも警戒している。臨床医からみれば、これこそ虚しい行為である。男性において「射精を伴うばあい［…］その種の努力もいいところせいぜい六・七回どまりだ」。[116] それ以上やろうとしても「もうなにも出ないか」、血液でなければ粘りけのない無色の精液しか出てこない。したがって、ときに飽くことを知らず、どのみち「頻繁な攻撃により長く耐えられる」女性には警戒しなければならない。たびたび引用されるユウェナリスによれば、メッサリーナ〔皇帝クラウディウスの皇妃。淫奔で、売春皇妃と称された〕は二十五回抱いても満足しなかったという。ヴィレーはこんな警句を述べている。十九世紀全般にわたって繰り返され、ピエール・ラルースの辞典にも顔をのぞかせている警句である。「したがって、このフェンシングでは女性ひとりが男性の約二人半に相当するらしい」。女性は消耗が少ないので、「もうじゅうぶん、と決して言わない」だけの力量を持っているのである。

しかし、繰り返すが、情熱は習慣で変わる。「日々の実践が」生殖器を調整し、その調整のおかげで「前日の快楽が翌日の快楽を呼びさまし、刺激して、いわば満足させる」[117] とリュイエは書いている。この点で、性交についても自慰と同じことがいえる。習慣が器官の増大を引き起こし、今度は器官が性的欲求を高める。淫蕩な人間がなかなか自分を抑えられない理由はここにある。逆に「ヴィーナスの快楽をほんの数ヶ月我慢しただけで、快楽がなくても平気でいられるようになる」。

また、習慣によって、男女のあいだの快楽の〈時期（テンピ）〉と激しさにかんする合意も容易ならしめることができる。快楽にかんして最も重要な点は、結局、〈パートナー同士の調和〉である。年齢、気質、外見にかんする同意は、性交がうまくゆく最も重要な条件としてつねに挙げられている。

補い合うふたつの身体が「調和の取れた協和音の感覚」を味わわせてくれる。この点にかんする描像は古典的である。ヴィレーは書いている。「褐色で、毛深く、乾いて、熱く、激しやすい男性が、繊細で、しっとりした、すべすべとして白く、おずおずとして慎み深い異性」[118] を見つけるとき、男性が「過剰、力、寛大という原理」を体現し、「〈欠如でできている〉」女性が、それゆえに「相手の過剰を［…］集め、吸収」しようとするとき、最も完璧な愛が現れる。あるいは、「非常に乾き、痩せていて、きびきびした身体の男性のためには、しっとりとして太り、いささか物憂げな女性（パートナー）が必要である」[119] と。女性において愛は欠如から生じ、男性において愛は過剰から生じるのである。

と同時に、不調和による損害が甚だしいこともある。性行為においては、なによりもまず両性の生殖器のあいだに完璧な調和が必要だが、両性の生殖器に〈大きさの釣り合いがきちんと取れていないと〉、重大な不都合を引き起こすばあいがある。[120] あまりに大きなペニスは「子宮頸部に激しくぶつかってしまう」。そこから苦痛、炎症、損傷、さらには硬性癌までが引き起こされる。したがって陰茎は膣の大きさと調和していなければならない。膣は平均六プースから七プース〔一プースは約二、七センチ〕の長さがある。ただ、ペニスがこの長さを越えると苦痛を感じる女性もいる一方で、性的な歓びを感じる女性もいる。[121] というのも、マルクの説明によれば、膣周辺

部は大きさが固定しているわけではないし、周知のように、この管はかなり拡張しうるからだ。その一方で、過剰な収縮に悩む女性もいる。

とうてい、生殖器の一致だけですべてが済むわけにはゆかない。マルクが強調するように、調和はまた器官の性質全体にもかかわってくるからである。そこから、この全面的一致が起こりそうな予感だけを示す、たいていは「気まぐれ」と形容されるものの重要性が帰結する。「心の言葉」[122]を左右するのがこれだが、この「心の言葉」を読みとる力はとりわけ女性に備わっている。女性は男性よりも淫欲に抵抗できるからである。

こうした調和の必要性から、ビュフォンは家族間・人種間の交配を強く奨めていた。その一方で、家族の遺伝的異常が継承されないように、マルクは結婚のたびごとに健康証明書を作成するよう要求している。医者は奇形の人間や、性病、ハンセン病、肺結核、腺病、くる病、癲癇に罹患した者、また、放蕩や自慰の過剰から衰弱状態を示している者を知らせなければならない。「これから共に暮らす両性が要求できる」[123]快楽の強度を見積もり、「共同生活がわれわれの神経に与える苦難」を、したがって、「精液の反復的喪失」に持ちこたえられるだけの強さを考慮しなければならないのである。こうしてマルクは、選択の自由を再び疑問に付している。

性行為においてカップルが取る体位は、古代からずっと医者と神学者を悩ませ続けてきた。体位にかんするかぎり、本書が研究対象とする時期のものにもほとんど新味はない。最も大切なのは、欲求、欲望、意思にかんしてカップルのあいだに了解が成りたっている点であると、きわめて自由なフルニエは考えている。いずれにせよ、臨床医全体としては、医学書を参照する必要も感じないほど、自然な体位を採用している。すでに見たように、ヒトの雌の形態、膣の傾き、直立が正常位を促している。ブルダッハはこの点を明快に説き、女性は仰向けになるべきだと言う。「この体位は、恥丘の弓状の広がり方、股関節間の距離、膣の方向、男性器の位置によって（女性が）どうしても取らざるを得ない体位である」[124]。その他の体位は人間よりもむしろ獣に属する。この自然な体位は陰茎全体を膣に導入することを許すので、怪我の危険が最も少ない、とモレル・ド・リュバンプレは付け加えている[125]。とりわけ、もっとも歓びを味わえるのがこの体位である。

臨床医の見るところ、歓びこそが最も大事な点である。繰り返しになるが、事が快楽にかかわると、臨床医の言説は叙情的な抑揚を帯びる。この体位を取るとき、「男は全感覚で幸福を味わう。心臓の拍動は、全身に快楽の徴候を与え、燃え立つ接吻は官能を呼び覚まし、腕のなかで脈打つ妻の百合のように白い肌が薔薇色に染まるところを目にする…快楽の絶頂を迎えるまえにも快楽を味わうのだ！　…陶酔をかき立てる女のまぶたを閉じさせ、『愛』がこれから快楽の源泉が開かれることを告げ知らせるとき、男は全身全霊で陶酔に身を投じる」[126]。放蕩が作り出す「官能の小道具」〔さまざまな体位のこと〕には、粗暴で、人を疲労させ、しかも妊娠に至らない快楽しか見いだせない。

医者はまた、立位による交接の害をこぞって指摘する。この体位はそもそも妊娠に不利である。受胎を回避する目的でまさにこの体位を取る民衆は、このことを知っている。窮屈で不自然な姿勢であるとリニャックは断言する。その苦痛と疲労を描写して、全神経が活動し、そのため目が回りそうで、「背中の棘骨が痛み、膝が震える」[127]と書いている。この体位はさまざまな病気を生むが、すでにティソがそれを嬉々として詳述している。ショパールが、次いで一八三〇年に出版された『獣医学文集』のなかでブレーが、この体位の危険について説明している。「立位で交接する男性にあっては、本来脊柱の方向に強度を向けるべきまざまな努力が、骨髄上の腰のふくらみに向けられてしまう」[128]。後にまた見ることになるが、ブルボン博士は一八五九年、博士論文全体をこの体位の研究に充て、と

りわけ麻痺に陥る危険性を警告している。[129] セリニャックとオリヴィエ・ダンジェはより一般的に、「腰部において、[…] 脊椎に過度の鬱血」をとりわけ引き起こしやすい、あらゆる「不自然な体位」の害を告発している。われわれの知る限り、ひとりシヴィアルだけが立位の交接を認めている。シヴィアルは、時間をかけた性交を困難にするこの体位が、他の体位よりも、最もゆゆしき堕落の源泉たる放蕩の洗練に向いていないと見るからである。[130] これに似た考えから、この体位に敵意をもつ臨床医のなかにも、慌ただしいカップルが「落ち着かない場所でそそくさと」[131] 快楽に耽ることしかできないときにはこれを容認する者がいる。

最も議論の尽きないのが、一般に四つんばいで交わる後背位である。すでに見たように、その器官から他の番い方ができず、想像力が快楽を刺激することもない動物のばあい、この体位は好都合にみえる。ところが人間のばあい、この体位を取ると、自然な体位をとったときのように感覚を総動員して官能を味わうことができない。しかも、すでに述べたように、男性器がより奥まで進入してしまい、危険が伴うこともある。ただ、後背位には利点もいくつかある。ルボーの言によれば、この体位でしか交われない女性もいるという。[132] 妊娠四・五ヶ月以降にはこの体位が推奨される。リニャックは、さまざまな注意を必要とするきわめてデリケートな女性にはこの体位を奨めている。[133] また、リニャックによれば、男性器が飛び抜けて大きいばあい、この体位がどうしても必要になる。なにしろ、女性は快楽を得るためになにも怖がらなくてよいし、外科医の考えるところでは、「愛の抱擁は同じくらい激しくとも、より間接的になるからである」。[134] ルボーはある種の不妊のばあいにこの体位を奨めているが、それはあくまでも女性に解剖学的な検討を加えてからにすぎない。[135] というのも、後背位で性交をすると、胸が水平になり腰部が高くなるため、精液がうまい方向に流れてゆくからだが、ただ、このとき想定されているのは、女性が手と膝をついている状態ではなく、手と足をついている状態である。加えて、このとき、あまり扇情的な動きで夫の情熱を刺激し、精液の過度の浸出を促進して疲労困憊させてはいけない。しかも、このような動きは、「畝溝から犂先」を奪う危険性がある。この体位を取るとき、夫婦の営みは妻に「冷淡さも嫌悪感もない、落ち着いた感覚」[136] を要求する。

本書が扱う時代の末期に、ルボーがこの問題にかんする素材を複雑にする。不妊症の女性のなかには、性交が原因で子宮転位する女性がいる。したがって、どの体位を奨めるべきか決めるまえに患者をよく調査する必要がある。そのために、医者はまず不妊症の女性が概ねとっている体位を取らせる。これによって仮に子宮転位が起こったときどんなメカニズムによって起こったのか見当がつけられるようになり、確実なカウンセリングを与えられるようになるのである。たとえば、ルボーによれば、「垂直」でしか妊娠しない女性がいる。ルボーが診たひとりの女性は、水平の姿勢で長いあいだ妊娠できなかったが、「骨盤を垂直にさせたら」[137] その後四人子どもを産んだという。

とはいえ、女性が男性の上に乗る体位、リニャックの表現を借りれば、妻が「快楽の上に飛び乗る」[138] 体位を非難する点において、医者は神学者と意見を同じくしている。このような体位では、営みの最中に男性が犠牲になる事故が多い。ドゥマルケはこうした事例にまるまる一冊の本を捧げているが、そこには、女性の恥骨と大腿にぶつかってペニスが捻れ、切断に至った例まである。三十七歳の馬丁、ジャン・Gは、一八五三年、妻と激しい性交をした。妻が夫の上になり、「誤って、怒張した陰茎に全体重でのしかかり、会陰と大腿部に向けてとつぜん陰茎を曲げた」。[139] 不幸なことに、夫は翌日壊疽でなくなった。

同じ理由からリニャックは、上流社会でかなり頻繁に用いられていた椅子の使用も、ものぐさや怠惰に属するさまざまな体位も止めるよう忠告している。後者は長い時間をかけた交接が可能になるた

め、射精のパワーを阻害してしまうからである。一方、カリペディア信奉者の一部が男女の生み分けを望む夫婦に推奨する軽業まがいの複雑な体位は、すでに廃れていた。

（第二章後半に続く）

（1）以下の引用にはフランス語訳を用いる。*La Génération ou exposition des phénomènes relatifs à cette fonction naturelle*, traduit de la *Physiologie* de M. de Haller, Paris, 1774.

（2）*Ibid.*, t. I, p. 82.

（3）*Ibid.*, t. I, p. 88.

（4）*Ibid.*, t. I, p. 83.

（5）Cf. *infra*, p. 148-149.

（6）*Ibid.*, t. I, p. 49. 子宮と乳房と頭の共感については、cf. BUFFON, *Œvres, op. cit.*, p. 217.

（7）*Ibid.*, t. I, p. 83.

（8）フーコーの分析を除き、十九世紀初頭の医学文献が男性支配の歴史の観点、あるいは性的抑圧の観点からのみ解釈されてきたのはそのためである。本稿はこの解釈を取らない。

（9）Docteur Bruno Jacques BÉRAUD, *Elément de physiologie de l'homme et des principaux vértébrés*, Paris, Germer-Baillère, 1857. したがって、この本をバシュレは読んでおり、その重要性を認めている。

（10）De LIGNAC (chirurguen), *De l'homme et la femme considérés physiologiquement dans l'état du mariage*, Lille. Henry, 2vol., 1772.

（11）Anthelme Richerand, *Nouveaux éléments de physiologie*, Paris, Caille & Ravier, 1811, t. II, p. 369.

（12）Julien Josephe VIREY, article《Homme》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1817. p. 230-231. 続く要素も同箇所。

（13）Julien Josephe VIREY, article《Libertinage》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1817. p. 230-231. 続く引用も同箇所。

（14）*Ibid.*, t. I, p. 119. ヴィレーはここで *l'Hisoire naturelle de l'homme, Œvres, op., cit.*, p.301. に見られる考察を発展させている。

（15）Julien Josephe VIREY, *De la femme... op.cit.*, p. 192.

（16）Julien Josephe VIREY, article《Libertinage》, article cité. p. 146-147.

（17）Julien Josephe VIREY, article《Homme》, article cité, p. 208. ビュフォンはすでにこの手の役割を力説していた。ヴォルテールは *Dicioonnaire philosophique*（article《amour》）のなかで、交尾中の動物は一方向でしか快楽を感じないと考えていた。

（18）Julien Josephe VIREY, article《Libertinage》, article cité. p. 119. 続く引用も同箇所。

（19）Julien Josephe VIREY, article《Homme》, article cité, p. 198. また、引用のテキストにかんしては、Jacques Louis MOREAU DE LA SARTHE, *Histoire naturelle de la femme..., op, cit.*, t.1, p. 48.

（20）Cf. *infra*, p. 93.

（21）Pierre ROUSSEL, *Système physique et moral..., op. cit.*, p. 145.

（22）*Ibid.*, p. 143.

（23）Julien Josephe VIREY, article《Frigidité》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1816. p. 23.

（24）DE MONTÈGRE, article《Continence》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1813. p. 102.

（25）C.F. BURDACH, *Taité de physiologie..., op., cit.*, t. II, p.17, 19 et 20.

（26）Jean Baptiste Félix DESCURET, *La médecine des passions ou les passions considérées dans leurs rapports avec les maladies, les lois et la religion*, Paris, Béchet et Labé, 1841, p. 6.

（27）*Ibid.*, p. 19.

（28）*Ibid.*, p. 222. Duscuret はここで、器官の欲望は愛の基礎であるとする Destutt de Tracyに全面的に賛同している（*De l'amours*, 1815. Voir édition

Gilbert Chinard, Paris, Les Belles Lettres, 1926, p. 2.）。

(29) 一七六七年、ル・カは「第六感」を、単純な触覚とは区別される高度な快楽・欲望感覚として記述している（Claude Nicolas LE CAT, *Traité des sensations et des passions en général et des sens particulier*, Paris, Vallat-La Chapelle, 1767, t. II, p. 215-217.）。Saint-Lambertはこの「第六感」を「繁殖欲」と同一視している。（《Analyse de l'homme et de la femme》, *Œvres philosophiques*, Paris, H. Agasse）, p. 801, t. I, p. 55.

(30) RULLIER, article《Génital》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1817. p. 124.

(31) Nicolas Philibert ADELON, *Physiologie de l'homme, op, cit.*, t. IV, p. 68 et p.69. 続く引用は p. 70.

(32) Claude François LALLEMAN, *Des pertes séminales involontaires*, Paris, Béchet jeune, 1836-1842, t. 2, p. 158 et 159.

(33) RULLIER, article《Génital》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, p. 125. 続く引用も同箇所。

(34) *Ibid.*, p. 126.

(35) Nicolas CHAMBON DE MONTAUX, *Des maladies des filles*, Paris, 1785, t. II, p. 73.

(36) Julien Josephe VIREY, *De la femme...*, *op.cit.*, p. 192.

(37) Jacques Louis MOREAU DE LA SARTHE, *Histoire naturelle de la femme...*, *op, cit.*, p. 190.

(38) RENAULDIN, article《Clitoris》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1813, p. 374.

(39) Léop. DESLANDES, *De l'onanisme...*, *op. cit.*, p. 185.

(40) Félix ROUBAUD, *Traité de l'impuissance et de la stérilité chez l'homme et chez la femme, comprenand l'exposition des moyens pour y remédier*, Paris, J.-B. Baillière, 1855, p. 533.

(41) *Ibid.*, p. 533.

(42) Idem.

(43) Charles MENVILLE DE PONSAN, *Histoire philosophique et médicale de la femme... op. cit.*, t. III, p. 289.

(44) *Ibid.*, t. III, 1821, p. 290.

(45) MURAT, article《Vagin》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1828. p. 163.

(46) Pierre Charles HUGUIER, *Mémoire sur les sciences médicales des appareils sécréteurs des organes génitaux externes de la femme*, Paris, J.-B. Baillère, 1850.

(47) COLOMBAT DE L'ISÈRE, *Traité complet des maladies des femmes...*, *op. cit.*, p.62, 63 et 64.

(48) Léop. DESLANDES, *De l'onanisme...*, *op. cit.*, p. 442.

(49) *Ibid.*, p. 444.

(50) *Ibid.*, p. 446.

(51) RULLIER, article《Génital》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1817, p. 126.続く引用は127.

(52) *Ibid.*, p. 126.

(53) Pierre-Jean CABANIS, *Rapport du physique et du moral...*, *op., cit.*, p. 198.

(54) *Ibid.*, p. 199.

(55) *Ibid.*, p. 202.

(56) RULLIER,《Génital》cité, p. 132.

(57) Léop. DESLANDES（*De l'onanisme...*, *op. cit.*, p. 386）はこの点にかんして、問題の一覧表を示している。

(58) Claude François LALLEMAN, *Des pertes séminales...*, *op. cit.*, t. II, p.172.

(59) これらの問題はすべて、Deslandesおよびlallemand, *Ibid.*, t. II. p. 57 *sq.*

(60) LOUYER-VILLERMAY, article《Nymphomanie》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1819, p. 109.

(61) Anthelme RICHERAND, *Nouveaux éléments de physiologie, op. cit.*, t. II, p. 50.

(62) Et. LABRUNIE, *Dissertation sur les dangers...*, thèse citée p. 34.

(63) FOURNIER, article《Coït》*Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1813, p. 524.

(64) Pierre ROUSSEL, *Système physique et moral..., op. cit.*, p. 151.

(65) FOURNIER et BÉGUIN, article《masturbation》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1819, p. 109.

(66) J. MOREL DE RUBEMPRÉ, *Les secrets de la génération ou l'art de procréer à volonté des filles ou des garçons, de faire des enfants d'esprit...*, 12e éd, Paris, Jules Ador, 1840. p. 109.

(67) 整合性を保ち、医者がそれぞれ勝手に病理とみなす行為について逐一詳細な説明をしないですませるためには、今後、このような医者の処方をひとまとめにして分類し直すことが重要になる。

(68) Pierre ROUSSEL, *Système physique et moral..., op. cit.*, p. 169.

(69) *Ibid.*, p. 171.

(70) *Ibid.*, p. 216-217.

(71) Alibertは（その *Physiologie des passions* あるいは *Nouvelle doctrine des sentiments moraux*, Paris, Béchet, 1825, t. II, p. 385のなかで）「障害の法則」について明言し、羞恥心がもつ効果の強度と文明の進歩のあいだには相関関係があると述べている。

(72) Julien Joseph VIRERY. article《Fille》, article citée, 1816, p. 500 et article《Femme》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1815, p. 506. このテーマについては著書 *De la femme...* で再度ふれている。

(73) J. MOREL DE RUBEMPRÉ, *Les secrets de la génération..., op. cit.*, p. 253.

(74) *Ibid.*, p. 253-254.

(75) Julien Josephe VIREY, article《Génération》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1817. p. 13.

(76) *Ibid.*, p. 28.

(77) *Ibid.*, p. 25.

(78) *Ibid.*, p. 23.

(79) J. MOREL DE RUBEMPRÉ, *Les secrets de la génération..., op. cit.*, p. 263.

(80) DE MONTÈGRE, article《Continence》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1813. p. 125.

(81) BILON, article《Plaisir》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1820. p. 132-133.

(82) Augustin HAGUETTE, *Essai sur le plaisir considéré relativement à la médecine*, thèse, Paris, 1820, n° 271, p. 36.

(83) FOURNIER, article《Coït》*Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, p. 521.

(84) Fodéré cité par MARC, article《Impuissance》*Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1818, p. 521.

(85) Léop. DESLANDES, *De l'onanisme..., op. cit.*, p. 90.

(86) 推奨されている禁欲のタイ〝ンケはもはや道徳神学のものではない。

(87) *Ibid.*, p. 91.

(88) Jacques Louis MOREAU DE LA SARTHE, *Histoire naturelle de la femme..., op, cit.*, t. 2, p. 299.

(89) F.M. CAILLRD, *Dissertation sur les dangers de l'incontinence pendant la gestation*, thèse, Paris, an XIII(1805), n° 435 p. 13.

(90) P. COURBY, *Des effets généraux des passions dans l'économie animale et de leur influence chez les femmes grosses*, thèse, Paris, 1807, n° 9, p. 25.

(91) Augustin HAGUETTE, *Essai sur le plaisir...*, thèse citée, Paris, p. 25.

(92) Charles Louis MOLLARD, *Essai sur l'hygiène des femmes enceintes*, thèse, Paris, 1815, n° 158, p. 34.

(93) F.M. CAILLRD, *Dissertation sur les dangers de l'incontinence...*, thèse citée, p.19.

(94) COLOMBAT DE L'ISÈRE, *Traité complet des maladies des femmes ..., op. cit.*, t. 3, p. 1355-1356.

(95) Charles MENVILLE DE PONSAN, *Histoire philosophique et médicale de la femme... op. cit.*, t. 2, p. 194.

(96) Anthelme RICHERAND, *Nouveaux éléments de physiologie..., op. cit.*, t. 2, p.

194.

(97) Charles MENVILLE DE PONSAN, *Histoire philosophique et médicale de la femme... op. cit.*, t. 1, p. 414 et 434.

(98) RULLIER, article《Génital》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, p. 133.

(99) COLOMBAT DE L'ISÈRE, *Traité complet des maladies des femmes..., op. cit.*, t. 1, p. 88 et 89.

(100) Albert BONHOMME, *De la lactation et de l'allaitement*, thèse, Paris, 1859, n° 89, p. 48.

(101) Joseph COQUIN (dit Martel), *Essai sur l'hygiène de la femme après l'accouchement*, thèse, Paris, 1815, n° 156, p. 25.

(102) J. CAPURON, *Traité des maladies des femmes depuis la puberté jusqu'à l'âge critique inclusivement, op. cit.*, 1817, p. 576.

(103) *Ibid.*, p. 599

(104) *Ibid.*, p. 603.

(105) C.F. BURDACH, *Taité de physiologie..., op., cit.*, t.II, p. 32. また、これに先立つものとしては、Julien Joseph VIREY, article《Femme》cité, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1817, p. 576.

(106) De LIGNAC, *De l'homme et la femme..., op. cit.*, t. 1, p. 369.

(107) *Ibid.*, p. 371.

(108) *Ibid.*, p. 377 et 378.

(109) *Ibid.*, p. 380.

(110) *Ibid.*, p. 381.

(111) *Ibid.*, p. 379.

(112) RULLIER, article《Génital》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, p. 122.

(113) Julien Josephe VIREY, *De la femme..., op. cit.*, p. 409.

(114) De LIGNAC, De *l'homme et la femme..., op. cit.*, t. 1, p. 365. 続く引用はp. 366.

(115) たとえばC.F. BURDACH, *Taité de physiologie..., op. cit.*, t.II, p. 148.

(116) Julien Josephe VIREY, *De la femme..., op. cit.*, p. 409.

(117) RULLIER, article《Génital》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, 1817. p. 120. 続く引用も。

(118) Julien Josephe VIREY, *De la femme..., op. cit.*, p. 195. 続く箇所も。

(119) *Ibid.*, p. 524.

(120) こうした厳命はわれわれが調べた著作にかんするかぎり常套句になっている。

(121) ここまでの部分にかんしてはすべて MARC, article《Impuissance》 *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, p. 520.

(122) MARC, article《Copulation》, *Dictionnaire des sciences médicales, op. cit.*, p. 520.

(123) *Ibid.*, p. 524.

(124) C.F. BURDACH, *Taité de physiologie..., op., cit.*, t. II, p. 156.

(125) J. MOREL DE RUBEMPRÉ, *Les secrets de la génération..., op. cit.*, p. 73.

(126) De LIGNAC, *De l'homme et la femme..., op. cit.*, t. 1, p. 300.

(127) *Ibid.*, p. 296.

(128) Antoine SÉLIGNAC, Des *rapprochement sexuels dans leur rapport étiologique avec les maladies*, thèse, Paris, 1961, n° 209, p. 22. に引用されている。

(129) Achille BOURDON, De *l'influence du coït et de l'onanisme dans la station sur la production des paralyses*, thèse, Paris, 1859, n° 115.

(130) Jean CIVIALE, *Traité pratique sur les maladies des organes génito-urinaires*, Paris, Fortin, 2e éd, 1841, t. II, p. 160 et 161.

(131) De LIGNAC, *De l'homme et la femme..., op. cit.*, t. 1, p. 296.

(132) CF. *supra*, p. 46.

(133) Jacques Louis MOREAU DE LA SARTHE, *Histoire naturelle de la femme..., op, cit.*, t. II, p. 301.

(134) De LIGNAC, *De l'homme et la femme..., op. cit.*, t. 1, p. 301.

(135) CF. *infra*, 113-114.

(136) Charles MENVILLE DE PONSAN, *Histoire philosophique et médicale de la femme... op. cit.*, t. II, p. 164.

(137) Felix ROUBAUD, *Traité de l'impuissance.... op. cit.*, t. 2, p. 772.

(138) De LIGNAC, *De l'homme et la femme...*, *op. cit.*, t. 1, p. 298.

(139) DEMARQUAY (chirurgien), *Des lésions du pénis déterminés par le coït*, Paris, Asselin, 1861, p. 10.これに詳細な説明を加えているのがAntoine SÉLIGNAC, *Des rapprochement sexuels...*, *thèse citée*, p. 60. 症例は一八五三年のユギエの診察による。